

< 論文 (英語学) >

リンディスファーン福音書とラッシュワース福音書の 行間注解と拡充形

堀 口 和 久

要旨

現存する古英語期の文献には、詩や宗教的散文、法律等の実用的文献以外に、ラテン語に対する古英語の注解 (gloss) や、ラテン語の文章の行間に古英語を書き込んだ行間注解 (interlinear gloss) が存在する。古英語期の代表的な行間注解としては、写本美術についてケルト文化の影響を受けた、その装飾写本の芸術的価値の高さが有名なリンディスファーン福音書、ラッシュワース福音書そして詩篇の行間注解が現存する。現代英語の進行形に対応する古英語の文法形態は、拡充形と呼ばれ、これまでにMossé (1938)、Nickel (1966) 等の包括的研究がある。しかしこのNickel (1966) やRaith (1951) ではリンディスファーン福音書のごく一部の例が部分的に例示的に扱われているにすぎず、この二つの福音書の行間注解の比較や包括的記述及び分析はなされていない。Kotake (2006) の研究は、部分的に拡充形を扱っているが、語順に着目した研究である。この論文では、リンディスファーン福音書及びラッシュワース福音書の古英語の行間注解を包括的に扱い、かつ用例の分布やラテン語との関係、意味・機能等を分析しようとするものである。結果的に、本論文では約490例の拡充形が存在することが分かり、かつラッシュワース福音書の複数の翻訳者の間で拡充形の出現頻度に大きな差があること、そして、行間注解と後期古英語の散文の福音書の間、拡充形の使い方について類似面があることが明らかになった。

キーワード 古英語 拡充形 進行形 行間注解 ラテン語 聖書

1 序

現存する古英語期の文献には、韻文の詩や宗教的散文、つまり説教集や聖人伝、法律（法的文書）、医学・天文学関連の実用的文献や年代記以外に、ラテン語に対する古英語の注解（gloss）や、ラテン語の文章の行間に古英語を書き込んだ行間注解（interlinear gloss）が存在する。古英語期の代表的な行間注解としては、装飾写本の芸術的価値の高さが有名なリンディスファーン福音書、ラッシュワース福音書そして詩篇の行間注解が現存する。この詩篇の行間注解については数多くの写本があり、今回の論文では網羅的に論じることができない。ラテン語のテキストのほとんどの語に古英語で注解をつけたものは、continuous glosses と呼ばれ、他方でラテン語のごく一部の難解語などに注解がつけられている場合は、occasional glosses と呼ばれるが、今回扱われているのは continuous glosses である。他のラテン語テキストに対する古英語の注解（glosses）はいくつか存在するが、ノーザンブリア方言のDurham Ritual Glossと詩篇を除いて、拡充形の用例はほとんど存在しない¹。

現代英語には進行形という動詞の表現形式が存在する。他方で、同じゲルマン語族であるドイツ語の場合は、標準ドイツ語の場合には進行形は存在しない。こうした点から英語の進行形は謎とされ、この現代英語の進行形については、これまで数多くの共時的な研究や通時的な研究がなされてきたが、依然として不明な点が多いといわれている。例えば、通時的に見て、古英語期にbeon/wesan+-ende（動詞の現在分詞）という構文が散見され拡充形と呼ばれる。また古英語期には-ing（-ungなど）という動名詞も存在するが、beon/wesan+-ing という用例はほぼ見当たらない。Waldend, wealdendといった動詞由来の動詞状名詞も存在するが、これと be 動詞が定型的に結びつく例もほとんどない。こうした背景の事情があるため、beon/wesan+-ende（動詞の現在分詞）という構文が取り上げられることになる。ただしこの構文は多

くの商品には全く例が存在せず、かつ同一商品のなかでも大きなゆれを示す。

こうした古英語の用例と現代英語の進行形の関係がどうなっているのかといった研究や、18世紀ごろ確立し定着したと漠然といわれる進行形についての歴史のかつ実証的研究などは、いまだに十分になされているとはいえない。この論文は、この前者の問題を少しでも明らかにするための研究であると言える。リンディスファーン福音書及びラッシュワース福音書のラテン語及び行間注解の校訂本は、出版年代が古い Skeat (1871-1887) しかないためこれを利用し、かつ Dictionary of Old English Corpus (2009) の CD-ROM も利用した。

2 従来の研究

現代英語の進行形に対応する古英語の文法形態は、拡充形 (the expanded form) と呼ばれ、これまでに Nickel (1966) 等の包括的研究がある。しかしこの Nickel (1966) や Raith (1951) ではリンディスファーン福音書のごく一部の例が部分的に扱われているにすぎず、この二つの福音書の行間注解の比較や包括的記述及び分析はなされていない。Kotake (2006) の研究は、部分的に拡充形を扱っているが、語順に着目した研究である。この論文では、リンディスファーン福音書及びラッシュワース福音書の古英語の行間注解を包括的に扱う。

これまでの研究の中には、古英語期の拡充形についてラテン語の影響であると主張する研究が存在した。確かにベータ (Bede) の英国民教会史の古英語訳は、ラテン語を直訳的に翻訳した部分が多く、拡充形の頻度が高い。また行間注解は当然のことながら、本文であるラテン語の影響を強く受けており、本論文で扱うリンディスファーン福音書及びラッシュワース福音書では、拡充形の頻度は、ラテン語の影響を受けているために高いように見える。しかしながら、ラッシュワース福音書については、行間注解の作者が複数存在することが知られており (Farman と Owun), 以下の述べる通り、筆者の違いにより、拡充形の頻度が大きく異なり、一方の注解の筆者 (Farman) については拡充形の頻度が大幅に低下する。

また、従来の研究は、ベアダの英国国民教会史の古英語訳やGregory's dialogueの古英語訳、*Cura Pastoralis*の古英語訳のようなラテン語の翻訳の影響の強い作品群や戦いの場面の多い *Orosius* の古英語訳が拡充形の頻度が高い作品として重点的に研究されてきた。本論文では扱えないが、Saint Machutusの聖者伝や、Let 1のような作品も拡充形の頻度が高く、今後はこれらの作品群についての詳細な分析も必要であると考えられる。

3 両福音書における拡充形の使用の状況と頻度

両福音書の拡充形の具体例については、本論文の末尾に表1から表4の形式で示している。両福音書の注解のどちらかで拡充形が用いられている全ての用例を取り上げ、その場合の他方の注解とラテン語を比較対照している。なお、両福音書のラテン語原文の間には異なる箇所が数多くあり、またkotake (2010)が論じているように Farman の注解についてはウルガタに近い別のラテン語テキストを参照した可能性があるが、便宜上、この表のラテン語の部分はリンディスファーン福音書の原文を引用し、かつラテン語の翻訳技法との関連で問題となる箇所については、ラッシュワース福音書のラテン語も併記してある(略語 Ru あるいは Li)。

Aldred が作者であるとされ、北部のノーザンブリア方言で書かれたとされるリンディスファーン福音書の古英語行間注解には、全体で279例の拡充形の用例が存在する。全体的に偏りなく、均質的に拡充形が分布していることが分かる。リンディスファーン福音書に関しては、ラテン語の福音書の成立年代が8世紀前半、そしてAldred による行間注解の執筆は970年ごろとされる。つまりラテン語の福音書がまず存在してその空いたスペースに古英語を書き加えたため、物理的制約のために、ラテン語と古英語の関係は、必ずしも機械的な1対1の関係とはなっていない。現存する古英語の注解の多くは、十分にはラテン語を習得できていない聖職者のラテン語学習や、読解の訓練の補助のためのものであると考えられる。

教育的効果を考えれば、ラテン語の語形を意識して現在分詞や拡充形で翻訳すべきであるにもかかわらず、分詞表現や拡充形ではスペースを多く必要とするから、物理的制約のために単純形で翻訳している箇所が確実に存在するのである。そのため他の古英語作品にも見られることであるが、ゆれがあり、首尾一貫性が存在しない。今回の分析作品であればヨハネ伝の14章以降では *locutus sum (est)* という表現が拡充形ではなく単純形で翻訳されている例を数多く見ることができる。こうした問題は現代英語の進行形のゆれとも関連がある可能性があり、言語理論的にも検討を必要とする。

ラッシュワース福音書に関しては、行間注解の筆者がマーシア方言の Farman であるとされる部分が Rushworth One (Ru 1) と呼ばれ、マタイ伝、マルコ伝の冒頭から2章15節まで、ヨハネ伝の18章の1節から3節までとされる。他方で、その他の福音書の箇所についてはOwunが注解を執筆したとされる Rushworth Two (Ru 2) と呼ばれる。Farman の注解については、明らかに拡充形の頻度が低く、Matthew:19, Mark:16, John:0 であり、総計で35例しか存在せず、リンディスファーン福音書のAldredとの違いが明らかである。つまり、リンディスファーン福音書のマタイ伝では、拡充形が約80例も存在するにもかかわらず、そのうち約60例で Farman は拡充形を用いず、ほとんどを単純形で翻訳しているのである。この Farman の注解の独自性については以前から研究があり、Kotake (2010) は Farman は Rushworth のラテン語原文ではなく、より Vulgate (ウルガタ聖書) に違い他のラテン語写本を参照して翻訳していること、そしていまでは失われた行間注解ではない散文の古英語訳福音書が他に存在して、それを行間に転写した可能性を指摘している。この可能性の当否については、拡充形の分析のみでは判断できないが、聖書の翻訳で拡充形は翻訳調の表現であると判断され、より自然な単純形に表現しなおした可能性がある。

他方で、Owun が翻訳したとされる他の福音書の箇所 (Ru 2) における拡充形は、全体で178例の具体例が存在することが分かる。一部、ラッシュワー

ス福音書には欠落部分があることや、異なるラテン語などの理由で、全ての用例について厳密に対応関係を分析することはできないが、翻訳技法に関しては極めて類似しており、明らかにリンディスファーン福音書を参照して転写している可能性があると言ってよいであろう。またルカ伝2章38節を *bidende* ではなくて、*biddende* と翻訳しており、逆にルカ伝9章18節では、*gebiddende* を *bidende* と翻訳しており、その他でも誤訳と思われる翻訳が見受けられ、翻訳者のラテン語に対する理解の不十分さをうかがわせる面が見られる²⁾。

4 拡充形で用いられている動詞

Orosius の古英語訳では戦いを表す *winnan*, *feohtan* といった動詞が高い頻度で拡充形の形式で用いられている。後期古英語の代表的な散文作家である *Aelfric* では *wunian* という動詞について高い頻度で拡充形が用いられている。他方で、多くの古英語の散文で幅広く拡充形が用いられているのは、発話に関する動詞（特に *sprecan*）と思考に関連する動詞（例えば *smeagan*）である。聖書の翻訳なので、戦いに関連する動詞の例が少ないのは当然であるが、思考に関連する動詞が少ないのはこの作品の文体的特徴となる。

今回の分析対象とした作品で頻度が高いのは、*sprecan* であり、ラテン語の *loquor* の翻訳であり、古英語の他の多くの作品と共通している。次が *faran*, *fylgian*, *cuman* といった移動を表す動詞である。これらは以下の8で論じるように、ラテン語の異態動詞との関連から生じているものと思われるラテン語の影響が考えられる。

5 ラテン語の翻訳技法と拡充形

古英語の拡充形は、*beon/wesan* という現代英語のBE動詞に相当する語句と、動詞に接尾辞として *ende* 等の語尾が付加された語形で終わる現在分詞という2語から構成される。以下の(1)のように、ラテン語の一つの単語について、古英語で *beon* あるいは *wesan* + 現在分詞の2語の注釈がなされていれば、こ

の *beon/wesan* と現在分詞は一つの文法的なまとまりを構成していることが明らかである。しかしこうした例は少ない。なぜなら、リンディスファーン福音書では、*double gloss* といって一つのラテン語の語彙に対して、「単純形の表現 + *1* (*vel* または) + 拡充形」という注解が古英語でなされているケースが多いからである。この「単純形 + 拡充形」については (2) を参照されたい。そしてこのような注解の場合に、*vel* の前と後の注解の関係について争いがあり、その意味関係がはっきりしないのである。Farman はこの箇所について単純形で翻訳しているが、Aldred は自然な英語は *geslepde* であるが、ラテン語の特別な時制、古英語にない時制に対する注意を喚起する意味で拡充形を用いている可能性もあるし、またゲルマン語固有表現と外来表現の差、文体の差、地域差・方言差等さまざまな可能性が考えられ、さらなる分析が必要とされる。ただし (1) のように一つのラテン語の語彙に対して *beon/wesan* + *ende* が対応するということは、古英語の 2 単語が一つの組となった文法表現が確立し成立していたことの証拠になるだろう。

(1) Matthew 13.34 L *loquebatur* OE *sprecende wæs*

(2) Matthew 8.24 L *dormiebat* OE *geslepde 1 slepende wæs*

さらに問題となるのは、ラテン語の *esse* と現在分詞がかなり離れていて、それぞれ古英語の *beon/wesan*、現在分詞に翻訳している場合である。こうしたケースでは、そもそも 2 単語が 1 つのユニットとして文法的なまとまりを形成しているか否かが定かではないことが多い。つまり *beon/wesan* は存在の意味で用いられており、古英語の現在分詞は同格的な用法の分詞表現となっている可能性のある例もある³。

6 ラテン語の迂言未来と古英語の拡充形

表 5 を参照すると、リンディスファーン福音書の行間注解では、*cuman*

(tocuman)の現在分詞である *tocymende* が拡充形で頻繁に用いられているが、これはラテン語の未来能動分詞を用いた迂言未来 *uenturus est* 等の表現を直訳的に2語で拡充形で表現したものである。表1のマタイ伝24章44節に見られるように、古英語では未来時制はあまり発達しておらず、現在時制で表現していたこと、そしてラテン語の未来分詞に直接的に対応する表現は古英語には存在せず *Farman* はこの該当箇所、古英語の現在時制で翻訳を行っている。なおこの箇所については(3)で示したように、後期古英語の福音書翻訳では未来の助動詞 *willan* を用いて翻訳している。

(3) *forþam beo ge gearwe. Forþam ðe mannes sunu wyle cuman...*

(ed. Liuzza (1994) p.51)

リンディスファーン福音書では、現在時制と区別し、未来の予定という迂言未来の独特の意味やニュアンスを拡充形で表現し、これが現代英語にまで意味機能的に用法が連続している可能性もある。

他方で、マタイ伝11章3節について、後期古英語の福音書翻訳と比較する。この箇所は、ラテン語では迂言未来、リンディスファーン福音書では現在および過去の拡充形、ラッシュワースは古英語の助動詞 *sculan* (現代英語の *shall*) そして、(2)のように散文の福音書翻訳では *Be* 動詞 (古英語の *beon/wesan*) +*to*不定詞で翻訳されているのである。

(4) *and cwæð eart þu þe to cummenne eart...* (Liuzza (1994) p.22)

なぜこのようなことが生じるかと言えば、古英語の現在分詞、過去分詞、不定詞の動詞活用語尾が極めて似ており、しばしば混同されるためである。古英語では現在分詞は *-ende* の語尾が通常で一般的であり、弱屈折動詞の過去分詞は *-ed* (*-od, -d*) であり、屈折変化すると *-ede* という語形となる。さらに *to*

不定詞の動詞活用語尾が-enneであり、この3つの活用語尾の間で、多くの混同が行われている。

往來を表す動詞以外に、マタイ伝26章21節等のラテン語も迂言未来が用いられている。「ユダが売ろうとしている、裏切ろうとしている」という場面であり、Farman も Aldred もマタイ伝26章21節では拡充形で翻訳がなされている。さらに未来との関係では未来完了形 (*dixerim*) を拡充形で翻訳している例が存在する (John 18. 21)。

7 ラテン語の独立奪格構文（絶対奪格構文）と *miððy* + 拡充形

ラテン語の影響の強い散文では、ラテン語の独立奪格構文（絶対奪格構文 *ablative absolute*）は、古英語でもそのまま独立与格構文として翻訳される場合がまれに存在する。

しかしこの両福音書では、ラテン語の翻訳的な (*Latinated*) 構文を用いることなく、時を表す従属接続詞を用いて理解しやすいようにしている箇所が見られ、以下の (5) (6) (7) のように、こうしたケースで拡充形が用いられている例を見出すことができる。

- (5) Matthew 9.32 L *egressis autem illis*
OE (Ru) *utgangende þa hie þa weron*
- (6) Matthew 26.47 L *Athuc ipso loquente*
OE (Li) *ðende wæs he spreccende*
- (7) John 8.30 L *haec illo loquente*
OE (Li) *miððy he uæs sprecende*

現代英語では時を表す副詞節内で進行形が用いられることが多いが、ラテン語の *cum* で始まる副詞節内の動詞の場合に、行間注解で拡充形が使われている例がある。例えば Matthew 14.32 の Aldred 訳は、ラテン語の原文を見ると

本来は拡充形にする必要はない例である。

8 ラテン語の未完了過去、異態動詞

その他、両福音書の行間注解で例として多いのは、ラテン語のimperfectつまり未完了過去の翻訳である。

さらに異態動詞の完了形を拡充形として翻訳するケースが極めて多い(*secutae sunt, locutus sum* など)。これは拡充形と受動態の混同から発展した翻訳技法の可能性がある。ラテン語の異態動詞の場合、形式は受動態の語形で意味は能動態という特徴を持つ。先述の *secutae sunt* であれば、*sunt* は古英語の be 動詞 (beon/wesan) で翻訳し、*secutae* については古英語の過去分詞に対応するが、古英語では過去分詞と現在分詞が非常に似通っているため、形式を重視して写本で過去分詞とすることももあるが、それでは意味内容が不明となるため現在分詞として翻訳し、そこから拡充形が広く使われるようになった可能性もある。

他方で、ベータの英国民教会史で頻繁に用いられる翻訳技法であるラテン語の同格的に用いられた現在分詞等を拡充形で翻訳する例は極めて少ない。

9 後期古英語の福音書の翻訳と両福音書の行間注解の比較

後期古英語には散文作品として福音書の古英語訳が存在する。この作品では、ラテン語の異態動詞の未完了過去形・完了形の翻訳としての拡充形が見られませんが全部で66例の拡充形の用例が存在する。またこの作品ではヨハネ伝に関しては拡充形の用例が全く存在しない。

後期古英語の散文の福音書の翻訳と両福音書の行間注解の比較はこれまでにあまりなされていない。行間注解から散文の福音書を見ると拡充形に翻訳されていない例を数多く目にするようになるが、逆に散文の福音書の拡充形から両福音書を見るとある程度の共通性や連続性に気づく。つまり39という半数以上の用例で、単語等は異なるが拡充形で翻訳されているのである。

ここでは詳説はしないが、後期古英語の散文の福音書で拡充形が用いられており、かつ両福音書でも拡充形となっているのは、Matthew 5.25, 6.34, 24.38, 27.61, Mark 1.22, 1.39, 2.6, 4.38, 5.5, 5.11, 13.11, 13.25, 14.49, Luke 1.10, 1.20, 1.21, 1.22, 2.8, 2.33, 4.20, 4.44, 5.10, 6.12, 9.18, 11.1, 11.14, 13.10, 19.17, 19.47, 21.37, 22.69, 24.32, 24.53 の用例である。

10 結論

リンディスファーン福音書およびラッシュワース福音書の両福音書の行間注解の古英語を網羅的に調べたところ、目次を入れると約500例の拡充形の用例が存在することが分かる。最も多く使われている動詞は *sprecan* であり *færan* (*faran*) が次に続く。Bede の古英語訳で頻繁に見られるような、ラテン語の同格的に用いられた現在分詞を古英語で拡充形に翻訳しているケースは少ない。ラテン語の未完了過去や未来分詞（迂言未来）あるいはラテン語の異態動詞の完了形や独立奪格構文の翻訳で拡充形が用いられている例が多い。時代を遡るかたちで、散文の後期古英語の福音書の拡充形について、両福音書の行間注解と比較すると、半数以上の例で行間注解でも拡充形が用いられている。

今後は、さらに古英語や中英語の作品との比較分析や、コーパスを活用したもっと後の時代の拡充形・進行形の研究を深め、進行形の通時的研究に資することを目指したい。

表 1 Matthew

	Old English (Lindisfarne)	Old English (Rushworth)	Latin
3.11	to cymende † toward is	æfter me cymeð	<i>uenturus est</i>
5.12	geohton	hoehtende sint	<i>persecute sunt</i>
5.23	& ðer eft ðencende ðu bist † beðences eft	gemyne bist	<i>et ibi recordatus fueris</i>
5.25	uæs ðu geðafsum	wæs gemod † beo ðu þencende	<i>Esto consentiens</i>
6.25	gemende gie sie	ge sorgige	<i>solliciti sitis</i>
6.31	gemende gesie	forþon ne sorgigaep ge	<i>solliciti esse</i>
6.34	ge ðonne sie gemendo	ne forþon sorgigaþ ge	<i>esse solliciti</i>
6.34	gemende bið	sorgaþ beoþ	<i>sollicitus erit</i>
8.1	fylgende weron † sint † gefylgdon	folgedun	<i>secutae sunt</i>
8.10	gewundrad wæs † geundrade	wundriende wæs	<i>miratus est</i>
8.24	geslepde † slepde wæs	slepte	<i>dormiebat</i>
8.26	frohtende aron gie	gefrohte sindun	<i>timidi estis</i>
9.9	fylgende wæs hine † him	& fylgænde wæs	<i>secutus est eum</i>
9.32	ða hia weron færend	utgangende þa hie þa weron	<i>egressis autem illis</i>
9.33	sprecende wæs	sprecende wæs	<i>locutus est</i>
9.36	gemilsade him † ðæm † milsande wæs	efnþrowade þæm	<i>misertus est eis</i>
11.3	to cymende wæs † is	cwome scalt	<i>uenturus es</i>
11.6	ne bið ondspyrnisse † ondspyrnende	ne bið geincfullad	<i>non fuerit scandalizatus</i>
11.23	were wungiende † ðætte hia gewunadon	hiæ wunade	<i>mansissent</i>
12.36	sprecende biðon	gesprecan beoþan	<i>locuti fuerint</i>
13.1	he gesætt † wæs sittende	gesæt	<i>sedebat</i>
13.2	astag † wæs stigende	astigende	<i>ascendens</i>
13.3	& spreccende wæs	& he sprec	<i>et locutus est</i>
13.5	ne hæfde † næbbend wæs	ne hefde	<i>non habebat</i>
13.5	ne hæfdon † næbbende weron	næfdon	<i>non habebant</i>
13.19	sawende wæs	sawen wæs	<i>seminatum est</i>
13.20	sawende wæs	gesauwen wæs	<i>seminatum est</i>
13.22	wæs sawænde	gesauwen wæs	<i>est seminatus</i>
13.23	sawende wæs	gesauwen wæs	<i>seminatus est</i>
13.33	sprecend wæs	sprec	<i>locutus est</i>
13.34	sprecende wæs	sprec	<i>locutus est</i>
13.34	sprecende wæs	sprec he	<i>loquebatur</i>

14.13	fylgende weron ƿ gefylgdon	folgedun	<i>secutę sunt</i>
14.14	milsande wæs	milsade	<i>misertus est</i>
14.27	sprecend wæs	sprec	<i>locutus est</i>
14.29	geongende wæs	eode	<i>ambulabat</i>
14.32	& miððy stigende weron	& þa hiæ astigan	<i>et cum ascendissent</i>
14.34	& miððy ofer þæt luh foerdon ƿ færrende woeron	& þa hie oferfæren hæfdon	<i>et cum transfretassent</i>
16.27	tocymmenda is	cymeþ ƿ cymende is	<i>uenturus est</i>
17.5	ða gett ƿ geana hine sprecende ƿ forðor he wæs sprecende	þende he þa gespræc	<i>athuc eo loquente</i>
17.11	tocymende is	cymeþ	<i>uenturus est</i>
17.12	geðrowed bið	þrowende bið	<i>passurus est</i>
18.15	gestrionend ƿ beotend ðu bist	þu gestreonest	<i>lucratus eris</i>
18.27	gemilsade ƿ milsande wæs	miltsende	<i>misertus</i>
18.33	wilsande aw	miltshade	<i>misertus sum</i>
19.2	& fylgende weron ƿ gefylgdon	& fylgadun	<i>et secutae sunt</i>
19.22	wæs forðon hæbbend	hæfde	<i>erat enim habens</i>
19.28	fylgendo sint	fylgende arun	<i>secuti estis</i>
20.10	gedoemende <ƿ><gedoemendo> weron	wendon	<i>arbitrati sunt</i>
20.10	weron onfengendo	sculdun onfoon	<i>essent accepturi</i>
20.22	ic drincende beom ƿ drinca	ic drincande beom	<i>ego bibiturus sum</i>
20.30	oferfoerde ƿ bieode ƿ wæs færende	foerde ƿ liorde	<i>transiret</i>
20.31	weron ceigendo	cleopadun	<i>clamabant</i>
20.34	milsande wæs	miltsende	<i>misertus</i>
20.34	& fylgende weron	& folgadun	<i>et secuti sunt</i>
21.9	weron clioppende	cleopadun	<i>clamabant</i>
21.9	to cymende is ƿ wæs	cymeþ	<i>uenturus est (uenit Ru)</i>
21.33	<ƿ> færrende wæs	gefoerde	<i>profectus est</i>
22.22	wundrigendo sint ƿ geundradon	wundradun	<i>mirati sunt</i>
23.1	sprecend wæs	spræc	<i>locutus est</i>
24.3	wæs sittende uutedlice he ƿ hine	sæt þa he	<i>sedente autem eo</i>
24.6	miððy geherend ƿ miððy gie geheras	forþon þe ge biop geherende	<i>audietis (Ru) audituri (Li)</i>
24.38	weron in dagum ær flod eton & druncun gesaldon	hi weron in ðæm dagum ær þa flodes etende & drincende & hemende & to hēmdes sellende	<i>erant in diebus ante diluium comedentes et bibentes et nubentes</i>

24.40	ondfoende bið ƿ him bið onfoen ƿ genumen bið	oþer bið genumen	<i>adsumetur</i>
24.42	tocymmende sie	cymid	<i>uenturus sit</i>
24.43	tocymende were	on hwilce hwile se þeof cuman walde	<i>uenturus esset</i>
24.43	waecca	he wæcende beon	<i>uigilaret</i>
24.44	tocymende is	cymeþ	<i>uenturus est</i> (<i>uentura est Ru</i>)
25.15	& gefoerende wæs	& foerdon	<i>et profectus est</i>
25.16	& wyrrende wæs	& worhtæ	<i>et operatus est</i>
25.16	& gestrionende wæs	& gestrionde	<i>et lucratus est</i>
25.20	ofer gestrionend am	gestrionde	<i>superlucratus sum</i>
25.22	gestrionende am	ic gestrionde	<i>lucratus sum</i> (<i>superlucratus Ru</i>)
26.10	hiu worhte ƿ hiu wæs wyrrenda	hio worhte	<i>operata est</i>
26.21	an iwer mec sellende bið	an eower me sellende bið	<i>unus uestrum me</i> <i>traditurus est</i>
26.25	salde hine (L. tradidit eum)	sellende wæs	<i>traditurus erat</i>
26.33	<ondspyrnendo> sie ƿ ondspyrnisse ðrowiga	æswice þrowige	<i>scandalizati fuerint</i>
26.47	ðende wæs he spreccende ƿ ða huile he <spræc>	þenden hiæ þa swa spreccun	<i>Athuc ipso loquente</i>
26.48	cyssende biom	ic cysse	<i>osculatus fuero</i>
26.49	cyssende wæs hine	& he cyste hine	<i>osculatus est eum</i>
26.58	uutedlice ƿ ðonne gefylgede ƿ fylgende wæs	petrus þonne folgade	<i>Petrus autem sequebatur</i>
26.71	uteode ða he to duru ƿ miððy uutedlice wæs he utgeongende to duru	þa he þa uteode	<i>exeunte autem illo</i> <i>ianuam</i>
27.19	ðrowende am	ic forþan þrowade	<i>passa sum</i>
27.25	& geondsuaerende wæs	& þa ondwyrdan	<i>et respondens</i>
27.55	fylegdon ƿ fylgende weron	ær fylgende werun	<i>secutae erant</i>
27.61	wæs ðonne ðer ðiu magdalenisca & oðero sittende	wæs þa þær maria se magdalenisca & oþer maria sittende	<i>Erat autem ibi maria</i> <i>magdalenae et altera</i> <i>maria sedentes</i>
28.13	& forstelun ƿ stelende weron	& forstælen	<i>et furati sunt</i>
28.18	spreccend wæs	spræc	<i>locutus est</i>

表2 Mark

	Old English (Lindisfarne)	Old English (Rushworth)	Latin
1.5	& foerende wæs ƿ foerde	& færende wæs ƿ foerde	<i>et egrediebatur</i>
1.6	brucende wæs ƿ gebrec	brucende wæs	<i>edebat</i>
1.18	fylgendo weron	fylgende werun him	<i>secute sunt eum</i>
1.20	fylgedon ƿ fylgende weron	fylgende wærun him	<i>secuti sunt</i>
1.22	wæs forðon lærende	wæs forþon lærende	<i>erat enim docens</i>
1.30	febrende wæs	fefer drifende	<i>febricitans</i>
1.36	& fylgend wæs	& fylgende wæs	<i>et secutus est eum</i>
1.39	& wæs bodande in somnungum hiora	& wæs bodande	<i>et erat praedicans</i>
1.41	ða wæs milsande	wæs miltsende	<i>misertus</i>
2.2	& sprecend wæs	& sprecende wæs	<i>loquebatur</i>
2.4	laeg ƿ licgende wæs	læg ƿ licgende wæs	<i>iacebat</i>
2.6	weron uutedlice ðer sume of uðuutum sittende & ðencendo ƿ smeande	weron wutudlice þær sume of uþwutum sittende & ðencende ƿ smeande	<i>erant autem illic quidam de scribis sedentes et cogitantes</i>
2.13	& færende wæs	& færende wæs	<i>et egressus est</i>
2.13	cymende wæs	cymende	<i>ueniebat</i>
2.14	fylgende wæs hine	fylgende wæs him	<i>secutus est eum</i>
2.15	& fylgdon ƿ fylgendo weron	& fylgdun ƿ fylgende werun him	<i>et sequebantur eum</i>
2.16	æt ƿ ett	ett ƿ etende wæs	<i>manducaret</i>
3.7	fylgende wæs hine	fylgende wærun him	<i>secuta est eum</i>
3.8	herdon ƿ herend weron	herende werun ƿ giherdun	<i>audientes</i>
3.8	he wycende wæs	wycende wæs	<i>faciebat</i>
3.11	& hia weron clioppende ƿ cliopadon	& cliopadun	<i>et clamabant</i>
4.5	uppiornende wæs ƿ arisæn wæs	upiornende wæs	<i>exortum est</i>
4.6	& ða arisen wæs ƿ ða upp eode wæs	& ða aras ƿ uparnende wæs	<i>et quando exortus est</i>
4.16	saues ƿ sauað	sawen ƿ sawende bið	<i>seminantur</i>
4.17	—	ah tide wexende werun	<i>temporales sunt</i>
4.34	ne wæs spræccend ƿ ne spræcc	wæs sprecende	<i>non loquebatur</i>
4.37	yð sende ƿ wæs færende	& yð færende	<i>fluctus mittebat</i>
4.38	& wæs ðe ƿ he in scipp on ƿ oferufa bolstare slepende	& wæs he ƿ ðe in scipe on ƿ ofer bolstre slepende	<i>et erat ipse in puppi supra ceruical dormiens</i>
4.39	stiorend wæs	stiorend wæs	<i>comminatus est</i>

5.5	wæs & cliopende & falletande ƿ ðærscende	wæs cliopende & falletende	<i>erat clamans et concidens erat et clamans et concidens (Li)</i>
5.10	& biddende wæs ƿ bæd	& biddende wæs	<i>et depræcabatur</i>
5.11	wæs uutedlice ðer ymb ðone mor wuorn berga ƿ swina michil foedende.	wæs wutudlice ðer ymb ðone mor worn berga ƿ swina micelra foedende.	<i>erat autem ibi circa montem grex porcorum magnus pascens</i>
5.13	& miððy færende weron	& mið ðy færende werun	<i>et exeuntes</i>
5.14	& færende woeron	& færende werun	<i>egressi sunt</i>
5.19	& milsande sie	& milsende sie	<i>misertus sit</i>
5.25	& ƿ ec þæt wif ðy wæs in utiornisc blodas	& wif seðe wæs in uutiornende blodas	<i>erat in profuio sanguinis</i>
5.40	ðer wæs ðæt mæden licende	wæs ðæt mægden licgende	<i>erat puella iacens</i>
5.42	& geeode ƿ geongende wæs	& eode ƿ gongende wæs	<i>et ambulabat</i>
6.34	& milsande wæs	& milsende wæs	<i>et misertus est</i>
6.50	gesprencend wæs	& sona he sprencende wæs	<i>et statim locutus est</i>
6.54	& miððy færende wæron	& mið ðy færende werun	<i>cumque egressi essent</i>
7.35	spreccend wæs	& sprencende wæs	<i>et loquebatur</i>
8.27	& gefoerde ƿ færende wæs	& færende wæs	<i>Et egressus est</i>
8.30	forbead ƿ stiorde ƿ stiorend wæs	& forbeod ƿ stiorde	<i>et comminatus est</i>
8.32	he wæs spræcend ƿ he gespræcc	sprencende wæs	<i>loquebatur</i>
8.33	stiorde ƿ forbeadend wæs	stiorende ƿ forbeodende wæs	<i>comminatus est</i>
8.34	& geceged ƿ gecliopad wæs	& cegende wæs	<i>Et conuocata</i>
8.38	ondetenta bið	ondettende bið	<i>confussus (confusus Li) fuerit</i>
9.4	& woeron sprencende mið ðæm hælende	& werun sprencende	<i>et erant loquentes cum iesu</i>
9.22	wæs milsende	wes milsende	<i>misertus</i>
9.24	& sona gecliopade	& sona gicliopade ƿ cegende wæs	<i>et continuo exclamans</i>
9.25	gestiorande wæs	gistiorende wæs	<i>comminatus est</i>
9.36	cliopende ƿ friende wæs	cliopende were	<i>complexus esset</i>
10.17	& miððy færende wæs	& mið ðy færende wæs	<i>et cum egressus esset</i>
10.22	seofende wæs	seofende wæs	<i>maerens erat</i>
10.32	& <foreode> ƿ onfora wæs geongend	& foreode ƿ gongende wæs	<i>et præcedebat</i>
11.16	oferferede	oferfærende ƿ færende were	<i>transferret</i>
11.25	& miððy gie biðon stondende	& miððy ge bioðun stondende	<i>et cum stabitis</i>
12.1	gefoerde ƿ færende wæs	gifoerde ƿ færende wæs	<i>profectus est</i>
13.1	& miððy gefoerde ƿ færende	& mið ðy færende wæs	<i>Et cum egredietur</i>

13.9	gie biðon stondende ꝛ gie stondes	ge bioðun stondende	<i>stabitis</i>
13.11	ne forðon biðon iuih spreccendo	ne forðon iow bioðon spreccende	<i>non enim uos estis loquentes</i>
13.25	biðon offallende	bioðun offallende	<i>erunt decidentes</i>
14.6	god woerc wyrçenda wæs	god were wyrçende wæs on mec	<i>bonum opus operata est in me</i>
14.11	gefeande <ꝛ><gefeando> woeron	gifeonde werun	<i>gauisi sunt</i>
14.31	gespræc ꝛ spreccend wæs	gispreccun	<i>loquebatur</i>
14.35	& miððy wæs færende ꝛ foerde	& mið ðy færende wæs	<i>Et cum processisset</i>
14.35	& gebædd ꝛ wæs biddend	& gibæd ꝛ biddende wæs	<i>et orabat</i>
14.44	& miððy cyssennde ic beom ꝛ ic see	ic cyssende ic biom	<i>osculatus fuero</i>
14.45	& cyssende wæs hine	& cyssende wæs hine	<i>et osculatus est eum</i>
14.49	eghwelc dæge ic wæs mið iuh in tempel lærend	eghwelce dæge ðis wæs mið iowih in temple lærende	<i>cotidie eram apud uos in templo docens</i>
14.54	fylgende wæs	fylgende wæs	<i>secutus est</i>
14.54	& gesætt ꝛ sittende wæs	& sæt	<i>et sedebat</i>
14.61	gefrægnende wæs	gifrægn	<i>interrogabat</i>
15.43	he wæs bidend	& he wæs biddende	<i>et ipse erat expectans</i>
16.19	& se drihten eç ꝛ soðlice æfter ðon spreccend wæs	& drihten soðlice <æfter> ðon spreccende wæs	<i>et dominus quidem postquam locutus est</i>

表3 Luke

	Old English (Lindisfarne)	Old English (Rushworth)	Latin
1.1	cunnendo woeron	cymende werun	<i>conati sunt</i>
1.10	& alli ðio menigo wæs ðæs folces biddende	& alle ðio mengu wæs ðæs folches biddende	<i>et omnis multitudo erat populi orans</i>
1.20	& heono ðu bist suigendæ	& heonu ðu bist swigende	<i>et ecce eris tacens</i>
1.21	& wæs þæt folc biddende	& wæs ðæt folc biddende	<i>et erat plebs expectans</i>
1.22	& he wæs becnende	& he wæs becnende	<i>et ipse erat innuens</i>
1.55	suæ gespreccen wæs	swa spreccende wæs	<i>sicut locutus est</i>
1.64	tunga his & spræccend wæs	tunga his spreccende wæs	<i>lingua eius tua loquebatur</i>
1.70	suæ spreccend wæs	swa spreccende wæs	<i>sicut locutus est</i>
2.3	ondetande weron	foreondetende werun	<i>profiterentur (Li)</i>
2.8	& ða hiorde woeron on lond þæt ilca wæccende & haldendo	& ða hiorðas werun in londe ðæt ilce wæccende & haldende	<i>pastores erant in regione eadem uigilantes et custodientes</i>
2.16	& cuomon	& comun ꝛ cymende werun	<i>et uenerunt</i>

2.20	& eftcerdon ƿ cerde weron	& eft gicerdun ƿ cerende werun	<i>et reuersi sunt</i>
2.25	ondredend wæs	ondredende	<i>timoratus</i>
2.33	& wæs fader his & moder wundraŋdo	& wæs fæder his & moder his wundraende	<i>et erat pater eius et mater eius mirantes</i>
2.38	sprecend wæs	sprecende wæs	<i>loquebatur</i>
2.38	gebiodon ƿ bidendo woeron	biddende werun	<i>exspectabant expectabant (Li)</i>
2.50	sprecend wæs	sprecende wæs	<i>locutus est</i>
3.23	& he ƿ se hælend wæs onginnende	& se hælend wæs onginnende	<i>et ipse iesus erat incipiens</i>
4.1	færend wæs	færende wæs	<i>regresus est (regressus Li)</i>
4.1	wæs doend	wæs doende	<i>agebatur</i>
4.14	& færende wæs se hælend	& færende wæs ðe hælend	<i>et egressus est iesus</i>
4.20	woeron bihaldendo	werun bihaldende	<i>erant intendentes</i>
4.42	ða dæge wæs færende eade	—	<i>autem die egressus ibat</i>
4.44	& wæs bodande on somnungum galiles	—	<i>et erat praedicans in synagogis galilaeae</i>
5.10	bist ðu niomende	—	<i>eris capiens</i>
5.15	ðerheode ƿ wæs geongende ðonne	—	<i>perambulabat autem</i>
5.17	woeron ða ælaruwas ƿ aldouuto sittendo	—	<i>et erant pharisaei sedentes</i>
5.27	wæs sittende to	—	<i>sedentem ad teloneum</i>
5.28	aras fylgende wæs him	—	<i>surgens secutus est eum</i>
6.12	& wæs ðerhwæccende in gebed godes	—	<i>et erat pernoctans in oratione dei</i>
7.12	wæs ferende	—	<i>efferebatur</i>
7.19	tocymende wæs ƿ arð	—	<i>uenturus es</i>
7.20	tocymende wæs ƿ arð	—	<i>uenturus es</i>
7.49	hliogende woeron	—	<i>discumbebant</i>
8.27	& miððy færende woere	—	<i>et cum egressus esset</i>
8.40	woeron forðon alle bidende hine	werun wutudlice alle biddende hine	<i>erant autem omnes expectantes eum</i>
8.55	& eftawoende wæs	& eftowende wæs	<i>et reuersus est</i>
9.11	gefylgendo woeron	fylgende werun	<i>secute(Li secutae) sunt</i>
9.18	miððy ana woere gebeddenda	miððy ane were & bidende werun	<i>cum solus esset orans</i>
9.30	gesprecon	sprecende mið hine wæs &	<i>loquebantur</i>
9.53	wæs færendes	wæs færende	<i>erat euntis</i>
10.1	wæs he tocymende	wæs he to cymende	<i>erat ipse uenturus</i>
10.17	eftcerdon ƿ awoendo woeron	eftcerrende werun	<i>Reuersi sunt</i>

11.1	miððy were in stowe sumre gebiddende	miððy were on stowwe sumre gibiddende	<i>cum esset in loco quodam orans</i>
11.14	& wæs worpende diowbles	& wæs worpende diowlas	<i>Et erat eiciens daemonium</i>
11.14	sprecend wæs	sprecende wæs	<i>locutus est</i>
11.37	& miððy gespręc	miððy sprecende bið	<i>Et cum loqueretur</i>
12.3	sprecend gie woeron	sprecende ge werun	<i>in aurem locuti estis</i>
12.8	ondetende bið	ondetende bið	<i>confessus fuerit</i>
12.40	cymeð	tocymende is	<i>uenturus est(Ru) ueniet(Li)</i>
13.2	ðrowendo weron ð biðon	ðuslico ðrowende werun	<i>passi sunt</i>
13.10	wæs uiteolice lærend	wutudlice wæs lærende	<i>autem erat docens</i>
14.22	sprecend wæs	sprecende wæs	<i>locutus est</i>
14.31	ð huælç cynig bið færende	ð hwelc cynig bið færende	<i>aut quis rex iturus</i>
15.13	færende wæs in lond unneh	foerende wæs in londe	<i>profectus est in regionem longinquam</i>
15.20	cyssende wæs hine	—	<i>osculatus est eum</i>
17.15	eftfærende wæs	eftfærende wæs	<i>regressus est</i>
18.28	fylgdon ð fylgendo we sindon	fyligdon	<i>secuti sumus te</i>
19.4	ðona wæs færende	ðona wæs færende	<i>inde erat transiturus</i>
19.17	ðu bist mæht ð onwæld hæbbende	ðu bist mæht ð onwæld hæbbende	<i>eris potestatem habens</i>
19.47	& wæs lærend	& wæs lærende	<i>erat docens</i>
19.48	hlosnende wæs	hlosnende wæs	<i>suspensus erat</i>
21.36	tocymendo sint	tocymende sindun	<i>futura sunt</i>
21.37	wæs ðonne dagum lęrende	wæs ðonne on dagum lærende on templo	<i>erat autem diebus docens in templo</i>
22.4	& spreccend wæs	& sprecende wæs	<i>et locutum est (locutus Li)</i>
22.23	doend were	doende were	<i>facturus esset</i>
22.39	& miððy wæs færende eade	& miððy wæs gongende	<i>Et egressus ibat</i>
22.39	fylgendo woeron	fylgende werun	<i>secuti sunt</i>
22.56	miððy woere hio sceauende	hio wæs scomende	<i>eum fuisset intuita</i>
22.69	of ðis uutedlice bið sunu monnes sittende	of ðisse wutudlice bið suno monnes sites	<i>Ex hoc autem erit filius hominis sedens</i>
23.8	wæs forðon willnande	wæs forðon wilnende	<i>erat autem cupiens</i>
23.14	suelce woere fromcerrende þæt folc	were <forcerrende>	<i>quasi auertentem populum (Ru quassi auerten)</i>
23.20	sprecend wæs	sprecende wæs to him	<i>locutus est ad illos</i>
23.49	fylgende woeron hine	fylgende werun him	<i>secute erant eum</i>
24.6	sprecend wæs	sprecende wæs	<i>locutus est</i>
24.9	& eftfærendo woeron	& eftfærende werun	<i>Et regressae</i>

24.15	miððy woeron spellendo ð gespelledon	miððy werun spellende	<i>dum famularen fabularentur (Li)</i>
24.18	ðu ana fremðe ð ellðiodig arð	ðu ana færende ð elðiodig arð	<i>tu solus peregrinus es</i>
24.25	gespreccendo woeron	sprecende werun	<i>locuti sunt</i>
24.32	bernende wæs	biornende wæs	<i>ardens erat</i>
24.33	eftfærende woeron in hierusalem	eftfærende werun	<i>regressi sunt in hierusalem</i>
24.44	sprecend ic am	sprecende ic am to iow	<i>locutus sum ad uos</i>
24.52	eftfærendo woeron	eftfærende werun	<i>regressi sunt</i>
24.53	& woeron symble in tempel lofando & gebloedsando	& werun symle on temple herende & bletsadun	<i>et erant semper in templo laudantes et benedicentes</i>

表 4 John

	Old English (Lindisfarne)	Old English (Rushworth)	Latin
1.15	æfter mec tocymende is	æfter me tocymende is	<i>post me uenturus est</i>
1.20	geondate ð andondetend (sic) uæs	and giondetted wæs	<i>confessus est</i>
1.20	ondetend uæs	—	<i>confessus est</i>
1.27	æfter mec tocymmende is ð uæs	æfter me tocymende is	<i>post me uenturus est</i>
1.28	uæs iohannes fulguande	wæs iohannes fulwende	<i>erat iohannes baptizans</i>
1.37	spreccende & fylgende <ð> <fylgendo> woeron	sprecende & fylgende werun	<i>loquentem et secuti sunt</i>
1.40	& fylgendo uoeron	& fylgende werun	<i>et secuti sunt</i>
3.23	uæs uutudlice eac iohannes fulwuande	wæs wutudlice ec & iohannes fulwende	<i>Erat autem et iohannis baptizans</i>
4.6	uoerig uæs ð of geong sittende uæs ð gesætt	woerig wæs of gonge sitende wæs ð sæt	<i>fatigatus ex itinere sedebat</i>
4.9	miððy arð drinca from mec	miððy arð drincende from me	<i>sum sis bibere a me</i>
5.9	& geade ð geongende uæs uæs uutedlice	& eode ð gongende wæs wæs wutudlice	<i>et ambulabat erat autem</i>
5.45	ic forhyccende ð sie	ic forhyccende sie	<i>ego accusaturus sim</i>
6.14	tocymende uæs in middangeard	tocymende is	<i>uenturus est in mundum</i>
6.15	tocymmende weron	tocymende were	<i>uenturi essent</i>
6.24	sohtun ð soecendo ðone hælend	sohtun ð soecende werun ðone hælend	<i>quaerentes iesum</i>
6.63	spreccende ð am	ic spreccende am	<i>locutus sum</i>
6.64	uoeron gelefendo	werun gilefende	<i>essent credentes</i>
6.64	sellende uere	sellende were	<i>traditurus esset</i>
6.71	ðes forðon uæs sellend ð hine	ðis wæs forðon sellende hine	<i>hic enim erat traditurus eum</i>

7.28	clioppande uæs	cliopende forðon	<i>Clamabat ergo</i>
7.35	færende uæs ð is	færende wæs	<i>iturus est</i>
7.35	færende is	færende wæs	<i>iturus est</i>
7.42	cuom crist	to cymende is crist	<i>uenit christus est christus</i>
7.46	suæ spræcende uæs	swa sprecende wæs	<i>sic locutus est</i>
8.12	spreccend uæs him se hælend	sprecende wæs him ðe hælend	<i>locutus est eis iesus</i>
8.20	ðas uordo spreccend uæs	ðis word sprecende wæs	<i>Hoc uerbum locutus est</i>
8.30	ðas hine spreccende ð miððy he uæs sprecende	ðas hine sprecende	<i>haec illo loquente</i>
8.40	spreccend am	sprecende am	<i>locutus sum</i>
9.29	moises sprecend uæs	moyses sprecende wæs	<i>moysi locutus est</i>
10.6	gespræcc ð gespræccend uæs him	sprecende wæs him	<i>loqueretur eis</i>
10.40	uæs iohannes fulguande ð clænsande	wæs iohannes gefulwad	<i>erat iohannes baptizans</i>
11.19	þætte hia uero gefroefrende	hia werun	<i>consolarentur</i>
11.31	fuilgendo ueron	fylgende werun	<i>secuti sunt</i>
11.35	& tæherende uæs	& teherende wæs	<i>et lacrimatus est iesus</i>
11.51	dead ð suoeltende were	deod ð sweltende were	<i>moriturus erat</i>
12.4	seðe uæs hine sellend uæs	seðe wæs hine sellende	<i>qui erat eum traditurus</i>
12.26	Gesoeca	fylgende bið	<i>sequatur</i>
12.29	him sprecend uæs	him sprecende wæs	<i>ei locutus est</i>
12.33	uere sueltende ð gedeðet	were deod ð sweltende wæs	<i>esset moriturus</i>
12.36	ðas uorda spreccend uæs	ðas word sprecende wæs	<i>haec locutus est</i>
12.41	& spreccend uæs	& sprecendes wæs	<i>et locutus est</i>
12.48	spreccend uæs ð am	sprecende ic am	<i>locutus sum</i>
12.49	nam ic spreccend ah	ne am ic sprecende ah	<i>non sum locutus sed</i>
14.22	ðu ædeauas ð ðu eauande arð	æteowes ð ðu æteowende arð	<i>manifestaturus es</i>
14.25	ðas ic spræcc ð iuih	ðas sprecende ic am iow	<i>haec locutus sum uobis</i>
15.3	spreccend am iuh	ic sprecende am iow	<i>locutus sum uobis</i>
15.11	ðas ic spræc ð to iuh	ðis sprecende ic am iow	<i>haec locutus sum uobis</i>
15.20	gif mec geoehon ð oehtendo ueron	gif mec oehtende werun	<i>si me persecuti sunt</i>
15.22	spreccend ic uere	sprecende him were	<i>locutus fuisset</i>
16.1	ðas ic spræc ð iuh	ðas sprecende ic am iow	<i>haec locutus sum uobis</i>
16.4	ah ðas spræcc ð iuh	ah ðas sprecende ic am iow	<i>sed haec locutus sum uobis</i>
16.6	ðas ic spræc	ðas sprecende ic am	<i>haec locutus sum</i>

16.33	ðas ic spræc	ðas ic sprecende am	<i>Haec locutus sum</i>
17.1	ðas spræcend uæs ð spræcc se hēlend	ðas sprecende wæs	<i>Haec locutus est</i>
18.15	gefylgend uæs ð gefylgede huoedre	fylgende wæs wutudlice	<i>Sequebatur autem</i>
18.16	petrus uutedlice gestod ð uæs stondende	petrus wutudlice stod to dura	<i>Petrus autem stabat</i>
18.18	stodun ð ueron stondende ða	stodon wutudlice	<i>Stabant autem</i>
18.20	ic eauunge ic spræcc ð spreccend am	ic eowunga sprecende am	<i>ego palam locutus sum</i>
18.20	spreccend am noht ð ne spræc ic	spreccende ic am nowiht	<i>locutus sum nihil</i>
18.21	ic spræc ð spræccend uæs	spreccende wæs ic	<i>locutus sum</i>
18.21	ða uord cuoedende uæs ic ð ic gecuæð	cweðende wæs ic	<i>quae dixerim</i>
18.23	gif ic yfle spræc	gif yfel sprecende am ic	<i>si male locutus sum</i>
18.30	gif nere ðes yfeldoend	gif ne were ðes yfelwyrccende	<i>si non esset hic malefactor</i>
19.6	cliopadon ð ueron cliopendo	cliopadun	<i>clamabant</i>
19.9	& foerde	& færende wæs	<i>et ingressus est</i>
20.20	gefeadon ð glæde ueron	gifeande werun	<i>gausi sunt</i>

表 5

	Lindisfarne	Rushworth One	Rushworth Two	Total
(ge) andswariende	1			1
behealdende	1		1	2
beotende	1			1
bicniende	1		1	2
(ge)biddende	5		6	11
bidende	4		2	6
blessiende	1			1
bodiende	2	1		3
brucende	1	1		2
byrnende	1		1	2
ciegende	1			1
(eft)cierrende	1		3	4
clænsiende	1			1
clipiende	5		3	8
cunniende	1			1
cweþende	1		1	2

リンディスファーン福音書とラッシュワース福音書の行間注解と拡充形 堀口

cumende, cymende (tocymende)	17	1	10	28
cysse	5			5
demende	1			1
doende	2		2	4
drifende			1	1
drincende	1	2	1	1
eawiende æt(iewende)	1		2	3
ehtende	1	1	1	3
etende		1	1	2
færende	28	2	20	50
feallende	1		1	2
febrende	1			1
fedende	1		1	2
(ge)ferende	2			1
forbeodende	2		1	3
forhygende			1	1
frefriende	1			1
frignende	2			2
frohtende	1			1
fulwiende	3		2	5
fylgende	24	8	15	47
gefeonde	1		1	2
geliefende	1		1	2
gongende	5		3	8
gymende	4			4
hæbbende	4		1	5
healdende	1		1	2
hemende		1		1
heriende	1		1	2
(ge)hierende	1	1	1	3
hlioniende	1			1
hlosniende	1		1	2
lærende	5	1	4	10
licgende	2	1	2	5
lofiende	1			1
miltse	8	1	4	13

千葉經濟論叢 第47号

nimende	1			1
offeallende	1			1
(fore)ondettende	4		3	7
ondspymende	2			2
onfengende	1			1
onfonde	1			1
onginnende	1		1	2
sawende	4		1	5
scamiende			1	1
sceawiende	1			1
secende			1	1
sellende	4	3	3	10
seofiende	1			1
sittende	9	2	1	12
slepende	2			2
sweagende		1		1
spellende	1		1	2
sprecende	51	2	47	100
standende	4			4
stelende	1			1
stiorende	3		3	6
stigende	2			2
gestreonende	4			4
sweltende	2		2	4
swigende	1		1	2
teherende	1		1	2
Þærscende	1			1
Þencende	2	1		3
þrowiende	2	1	1	4
þruhwaccende	1			1
upiornende	1		2	3
utgangende	1	1		2
wæccende	1	1	1	3
weaxende			1	1
weorpende	1		1	2
willniende	1		1	2
wundriende	2	1	1	4
wuniende	1			1

wyrcende	4		1	4
yfeldoende	1			1
yfelwyrcende			1	1
Total	279	35	178	492

10 参考文献

- Fulk, R.D. and Cain, C.M. (2003) *A History of Old English Literature*
Blackwell Publishing
- 唐澤一友 (2008) アングロサクソン文学史：散文編 東信堂
- Kotake, Tadashi (2006) "Aldred's Multiple Glosses : Is the Order Significant?" in *Textual and Contextual Studies in Medieval England : Towards the Reunion of Linguistics and Philology* Ed. M. Ogura. Frankfurt am Main : Peter Lang, 35-50
- Kotake, Tadashi (2010) Farman's Changing Syntax: A Linguistic and Palaeographical Survey in *Aspects of the History of English Language and Literature* Edd. O. Imayahashi, Y. Nakao, M. Ogura. Frankfurt am Main : Peter Lang, 241-255
- Liuzza, R.M. (ed. 2000) *The Old English Version of the Gospels* vol.1 EETS O.S. 304
- Mossé, Fernand (1938) *Histoire de la Forme Periphrastique être+Participe Present en Germanique*. 2 vols. Paris Libraire C.Klincksieck
- Nickel, Gerhard. (1966) *Die Expanded Form im Altenglischen: Vorkommen, Funktion und Herkunft der Umschreibung beon/wesan + Partizip Präsens*. Neumünster: Karl Wachholtz.
- 小野 茂, 中尾俊夫 (1980) 英語学大系 第8巻 英語史 I 大修館書店
- Raith, J. (1951) *Untersuchungen zum Englischen Aspekt* I Teil Max Huebar
- Skeat, W.W. (ed. 1871-1887) *The Holy Gospels : in Anglo-Saxon and Northumbrian Versions Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS* 4vols. Cambridge University Press
- The Dictionary of Old English Corpus CD-ROM* (2009)

(Endnotes)

- ¹ Aldred は Lindisfarne Gloss だけでなく, Durham Ritual についても古英語の注解を執筆したといわれているが, その拡充形の頻度はあまり高くない。
- ² これらの用例以外に, 目次, 見出しに相当する Headings の箇所にわずかであるが, 拡充形の用例が見られる。マタイ伝であれば, 以下の2例が存在する。上の例は, ラテン語から見ると拡充形かどうかは疑わしい。
- (1) Latin : *uox clamantis sit* OE stefn cliopende l ceigende sie
- (2) Latin : *Interrogantes* OE gefrasende weron
さらにマルコ伝には, 以下の1例が存在する。ヨハネ伝にも
- (3) Latin : *passuri* OE weron ðrowende
- (4) Latin : *erat faciens* OE uæs doende
- (5) Latin : *sint passuri* OE uoeron <ðrouende>
- ³ マタイ伝24章38節の用例が代表的である。この用例については散文の福音書でも拡充形となっているが, 問題があることについてはRaith (1951) p.81参照。

(ほりぐち かずひさ 本学准教授)